

## アブラヤシ農民の焼畑回帰

### インドネシア共和国東カリマンタン州におけるダヤック人の生計戦略

国際協力学専攻 47-176777 沖田広希

指導教員：佐藤仁 教授

キーワード：カリマンタン、焼畑、パーム油、生計戦略、他者の合理性

#### 問いと目的

2018年9月、本研究の対象地であるインドネシア東カリマンタン州のプラウピナン村にて、アブラヤシ生産を行う農民たちは消失した焼畑農業を取り戻そうと、「焼畑復興プロジェクト」を立ち上げた。これは、近代化の中で焼畑を放棄し、代わりに収益性の高いアブラヤシを選択してきた村人たちのこれまでの発展経路とはまさに逆行する動きである。

なぜ村人たちは焼畑農業の復興という一見すると「不合理」な選択をしているのだろうか。本研究では、「アブラヤシ生産が浸透している地域において、焼畑に戻ろうとする農民がいるのはなぜか」という問いを設定し、これに答えを出す過程で、アブラヤシを生産する農民の合理性、及びその行動原理を理解し、現代の農村社会における焼畑の意味を問い直したい。

#### 研究の背景と先行研究

アブラヤシ農民の行動原理に理解を示すことは、決して私たちの生活に無関係のことではない。アブラヤシから採れるパーム油は、様々な製品に加工されており、今や私たちの生活には欠かせない生産物である。また、世界第一位のパーム油産出国であるインドネシアでは、生産量の30%以上は「小規模農家 (Smallholder)」と言われる農民たちの手によって作られている。そして、パーム油産業のさらなる発展のために、農民によるアブラヤシ生産の高度化が期待されており、インドネシア政府や国際機関が積極的に支援を行っている。つまり、アブラヤシ農民の行動原理を理解することは、農民の生産支援の質的改善に寄与し、ひいては、そこでつくられた商品を日々消費する私たちの生活を下支えすることにも貢献することになる。

農民にとってアブラヤシは現金収入源を確保する上では優位性のある作物だが(Feintrenie et al. 2010)、必ずしも農民の生計活動にとって望ましいものではないということが明らかにされてきた(寺内ほか2010)。しかし、農民がその長短所を認識した上で、どのようにアブラヤシを生計の中に組み込んでいるのか、という点に関する考察は限定的である。また、アブラヤシが浸透する地域では、階層分化が発生していることは論じられてきたが(McCarthy 2010)、アブラヤシを含んだ生計の階層間の異なりにまで考察が行き届いていない。よって、本研究では、農民がどのような判断を元にアブラヤシを生計に組み込んでいるのか、その生計戦略を階層ごとに分析した。

#### 研究の方法

本研究は一つの農村を対象にした事例研究である。対象村の主な構成員はカリマンタンの先住民ダヤック(Dayaks)であり、彼らは2000年以降、生計の中心を焼畑からアブラヤシへと変容させてきた。

調査では主に3つの方法を用いた。半構造化インタビューによって世帯調査を行い、各世帯の生計戦略の移り変わりや現在のアブラヤシを包摂した生計の様子を把握した。また、村人による村人の豊かさランキング付けとも呼べる「相互評価法 (Wealth Ranking)」を用いて対象世帯の階層分けを行った。加えて、村人の合理性を理解するために、参与観察法を採用し、村の慣習長の自宅に滞在しながら情報を収集した。

フィールドワークは2018年7月上旬-9月中旬に実施し、通訳や補助員を用いずに筆者がインドネシア語を介して単独で行った。

## 結果①—各階層のアブラヤシ農民の生計戦略—

対象村全体を見ると、農民の生計はアブラヤシの果房販売に強く依存していることや、各世帯の経済状況が不均衡であることが分かった。相互評価法によって階層分けした結果、上位層に分類される世帯はアブラヤシだけでなく、それ以外にも安定的収入源を保持していることが評価されていた。中間層はアブラヤシから安定的な収入を得ている一方で、それ以外の収入源を持たないこと、下位層はアブラヤシ果房販売からの収入が確保できていないことが評価の基準であった。

世帯調査から得た情報を元に各階層の生計を分析したところ、上位層と中間層はアブラヤシの生産によって豊かさを獲得してきたものの、生産拡大に対する意欲は減退していることが分かった。また、その要因は各階層で異なっており、上位層はより収益性の高い他ビジネスの拡大へと関心が移っていること、中間層はアブラヤシ生産やそれがもたらす周囲の社会経済変動に対して抱く不安に起因していた。調査では、不安要素の中でも特に焼畑の消失に注目し、その反動で生まれた「焼畑回帰志向」の様相を考察した。

## 結果②—「焼畑回帰志向」の成り立ちと目的—

村人たちの焼畑回帰志向は「焼畑復興プロジェクト」として実現した。調査では、これに参加する村人たちへのインタビューなどから、彼らが焼畑を取り戻そうとする目的を明らかにした。

村人は依然として、焼畑から食糧を確保することを重視していた。この背景には、飢餓の危機を焼畑の休閑地利用によって幾度となく乗り越えた歴史が強く影響しており、不確実性に対して柔軟に対応できる「生存のためのセーフティネット」としての焼畑を求めていることが分かった。また、村人たちは民族の伝統や文化を守るために焼畑を取り戻そうとしていることも明らかになった。焼畑農業の消失は村人たちのアイデンティティの喪失を意味しており、村人たちは焼畑の復興によってそれを防ぼうとしていた。

さらに、本研究では焼畑回帰の現実化を後押しし

た推進力の所在も考察した。調査の中で、村人は企業や政府に抑圧されたという認識を強く持っており、それに対する反発心が焼畑復興を後押しする推進力として転換されていることが分かった。

## 結論と示唆

「アブラヤシ生産が浸透している地域において、焼畑に戻ろうとする農民がいるのはなぜか」という問いに対して、「焼畑農業は農民に様々な価値を提供しているから」という結論を導出した。調査から明らかになった焼畑の機能は「生存のためのセーフティネット機能」、「民族としてのアイデンティティ構築・維持機能」、「強者に対抗するための政治的機能」であった。加えて、焼畑の政治的機能をポラニー(2009)の「二重の運動」の枠組みに当てはめ、市場メカニズムの悪影響から社会を防衛するための「対抗運動-CounterMovement-」としての解釈を試みた。

本研究はアブラヤシ農民の行動原理が経済動機だけでなく、地域固有の歴史や社会文化的要因によっても規定されている可能性を示唆している。加えて、村人たちの焼畑回帰という「不合理」に見える行動の理由を説明したことで、現代の農村社会における焼畑の意味を再考するための新しい視点を与えた。

## 参考文献

- Feintrenie, L., Chong, W. K., & Levang, P. (2010). Why do farmers prefer oil palm? lessons learnt from Bungo district, Indonesia. *Small-Scale Forestry*, 9(3), 379-396.
- McCarthy, J. F. (2010). Processes of inclusion and adverse incorporation: oil palm and agrarian change in Sumatra, Indonesia. *The Journal of peasant studies*, 37(4), 821-850.
- 寺内大左, 説田巧 & 井上真. (2010). ラタン, ゴム, アブラヤシに対する焼畑民の選好. *日本森林学会誌*, 92(5), 247-254.
- ポラニー・カール. (2009). 『新訳 大転換—市場社会の形成と崩壊』. 野口建彦, 栖原学 (訳). 東洋経済新報社. (原著: Karl Polanyi(1944). *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time*. Beacon Press Boston)